

令和7年度

第9回 きやま創作劇

夢と継ぐ者

脚本・演出 福永 真理子

題字 松田 朴伝
原画制作 デザイン 安東 華保

令和7年 12月14日 (日)

1回目 11:30 開演 (11:00 開場)

2回目 16:00 開演 (15:30 開場)

基山町民会館 大ホール
入場無料

主催：きやま創作劇実行委員会
基山町
基山町教育委員会

お問い合わせ先 / 基山町まちづくり課
文化・スポーツ係 ☎ 0942-92-7935

本事業は『基山町歴史的風致維持向上計画』に基づく「歴史まちづくり普及啓発事業」として実施しています。

「夢を継ぐ者」 あらすじ

時は延宝三年（1675）。対馬藩にて、ある会談が行われていた。それは、対馬藩の「飛び地」である、基肄養父・田代領からの年貢米の徴収が滞っているという報告を受けただからだ。この事態を治めるべく白羽の矢をたてられたのが、賀島兵助だった。兵助は、対馬藩田代代官所佐役（副代官）という大役の命を受け、田代領へとやってきた。

田代領に着いた兵助一家は、この地の荒廃ぶりを目の当たりにする。国元からの献金・献米の無理強い、領民を苦しめていることもさることながら、何よりも驚いたのは、暮らしに困っているながらも、質素儉約につとめていない領民たちの姿だった。兵助は、「まず領民に、人としての考え方から教えてゆかねば」と決意する。

それから四年後の延宝七年（1679）。兵助がつくった田代領民の生活の改善を促すための「三十三ヶ条の壁書」は、少しずつ村々へ浸透してゆき、領民たちの暮らしも落ち着きを取り戻していった。兵助の息子・兵庫も、田代領民のため寺子屋を開き、読み書きを教え、村人に親しまれる存在となっていた。

四年間の間に仲良くなった井方頭十郎が、ある日、歴史書を持って兵庫の元に戻ってきた。その本には、田代領内にある基山に朝鮮式の山城を造ったという歴史が書かれていた。しかもその本は、芝居仕立てになっており、この本を読んだ頭十郎は、次第に芝居に心惹かれていく。

時は六月。荒穂神社の夏越祭りの日。境内にはたくさんさんの村人が集まり、祭りを楽しんでいた。頭十郎はそこで、先日の歴史書に書かれた基山の芝居をしようとするが、そこに頭十郎の母・おつねが現れる。「芝居など言語道断」と怒りをあらわにするおつね。兵庫は親友のために「頭十郎に芝居をさせてやってほしい」とおつねに頭を下げる。が…

若者たちが友を思い、親を思いながら、懸命に自らの生き方を模索していく姿を描く。

「夢」とは、すなわち「心」であり「命」。

その言葉を胸に、十年の月日を経て、今、兵庫は、基肄養父の地を旅立つのであった。

※「賀島兵助」の表記は、古文書上様々ですが、きやま創作劇では『基山町史』下巻の記載に従っております。

夢を継ぐ者

■みんな
それぞれの「夢」を継ぐ・・・■



■公演の舞台・荒穂神社■



■演舞の練習■



■公演にむけて練習の様子■

